

寒冷地形談話会通信

1990年第5号 1991.4.20発行

1. 12月例会の報告

1990年12月22日、明治大学にて12月例会が開催され、以下の発表が行なわれました。参加者=19名。

▽小川真由美（都立大・院）：「山地小流域における少雪年の融雪流出について」

流域水文学の概要を述べ、事例研究として融雪流出について発表した。水文学は、環境と水との相互関係を研究する学問で、そのカバーする領域は広く、関連科学との境界は引きにくい。また、研究の対象によって、地球水文学から斜面水文学までの様々なスケールの水文学が考えられる。本研究では融雪流出現象を化学的に考え、福島県会津田島の山地森林小流域で融雪期を含む通年にわたる水質調査を行なった。そして、少雪年であっても融雪期には融雪流出特有の河川水質の変動（融雪水の増加に対応した $\text{Cl}^- \cdot \text{SO}_4^{2-}$ イオンの増加と HCO_3^- イオンの減少）が観測されること、また、暖冬の影響で夜間にも気温が氷点下にならず、寒冷地域のような気温の日変化に対応した河川流量や河川水質の変動は見られなかったことなどの結果が得られた。【文責：小川】

また、恒例となりましたスライド（ビデオ）大会も催され、学術的関心をひくもの、笑いを禁じえないものなど多数の映像が披露されました。さらに、場所を変えて忘年会が開かれ会員相互の親睦が深められました。

2. 2月例会の報告

1991年2月23日、東京大学（本郷）にて2月例会が開催されました。発表内容は以下の通りです。参加者=22名。

▽岩船昌起（東北大・院）：「北アルプス穂高岳・涸沢カールにおけるチズゴケの分布から推定した残雪地の拡大と岩屑生産」

チズゴケは一般に過雪環境下で生育しないとされている（Haeberli et al., 1979）ので、残雪地の変動をライケノメトリーから推定できると考えた。一方、雪の影響を受けにくいフリーフェイスでは基盤岩剥離（岩屑生産）がチズゴケの生育を規制していると考えられる。そこで、形成年代が相対的に明らかな涸沢カール内の崖錘斜面とフリーフェイスでチズゴケの分布を観察し、過去の残雪地の拡大、岩屑生産期と残雪地拡大期の対応および岩屑生産のメカニズムを考察した。チズゴケ最大径出現頻度と成長曲線（関根，1989）との比較から、涸沢カール内の崖錘斜面では30-40年前にチズゴケ生育可能環境に変化したと推定される。このことは大正池における残雪深（3月）の変化、すなわち1950-65年ごろには現在よりも残雪が多かった事実と調和的である。また、フリーフェイスからの岩屑生産がピークに達した時期もこの残雪拡大期と一致する。ただ、残雪の消長は積雪量と融雪期の気候条件に支配されることから、偶発的な雪崩で涵養されている涸沢の雪渓が永年の気候変化を反映しているかどうか疑問が残る。また夏季気温や降水量の変化傾向とも対応させて論じる必要がある。【文責：苅谷／本発表は地理学会91年春予稿集にも掲載されています。】

▽吉田 浩（都立大・院）：「焼岳火山群の噴火史」

焼岳は歴史時代に噴火した記録がある火山で、なかでも大正4年の噴火で梓川をせき止め大正池をつくったことは有名である。焼岳火山群(原山、1990)は、割谷山火山・白谷山火山の旧期火山体と岩坪山火山・焼岳火山・アカンダナ山火山の新規火山体からなる火山群である。岩石は黒雲母輝石角閃石安山岩-デイサイトである。火砕流→厚い溶岩流(溶岩円頂丘)という一輪廻の噴火が多い。それぞれの火山では、火砕流期→溶岩流期→山体崩壊→溶岩円頂丘期→火砕流期と移行している。焼岳火山で近い将来起こる噴火は、火山灰を噴出したリラハール(泥流)を流出する――1907～1939年噴火のような――可能性が高い。同時に水蒸気爆発による焼岳の山体崩壊も考えられる。この場合、岩脈の構造から、東側斜面(梓川方面)または西側斜面(平湯川、蒲田川方面)が崩壊すると考えられる。

当会例会終了後、「上高地自然史研究会」第1回集会が開かれ、発起人(岩船昌起氏)より「上高地自然史研究会設立の意義」が発表されました。

3. 3月例会の報告

1991年3月23日、明治大学にて3月例会が開催されました。以下の発表が行なわれました。参加者=19名。

▽大宮 剛(学芸大・学)：「雲取山におけるブナ林の立地条件(卒論)」

《事務局よりお詫び》事務局の不手際により、今号に大宮氏の要旨を掲載できませんでした。大宮氏および皆様にお詫びいたします。91年度第1号に掲載させていただきます。

▽和気智宏(学芸大・学)：「山梨県日川、重川上流域における地形の相違とその成立要因(卒論)」

日川、重川は大菩薩嶺付近から発する笛吹川の支流である。その上流部は隣あうにもかかわらず起伏量(現河床と周囲の山地)や崩壊地の分布に明らかな違いがある。そこで、室内作業と現地調査から、これら地形の相違を生じさせた原因と地形発達を考察した。日川のばあい下流方に露出する中生界(小仏層)が谷頭侵食の延伸を妨げていること、および上流からの供給物質をせき止めているため小起伏地形が保存されてきたと推定される。一方、重川は初期段階から大起伏地形をなしていたと想像されるが、なぜそうになっていたかを明らかにすることはできなかった(活断層の存在も考えられる)。この他、氷期の周氷河環境や後氷期の多雨化の影響も考慮する必要があるが、それは今後の課題である。

【文責：荻谷】

当会例会終了後、上高地自然史研究会第2回集会が開かれ、伊藤真人氏(高層気象台)による「最終氷期のターミナル・モレーンについて」と題する講演が行なわれました。

▽槍・穂高連峰における氷河研究のレビューに始まり、日本の氷河研究の展望、上高地周辺における氷河研究の課題などを述べた。氷河研究の課題として、蝶ヶ岳期に対応する氷河前進期のモレーンを発見すること、横尾左俣カールの岩石氷河の研究、南岳稜線の礫層の成因を明らかにすることなどが指摘され、上高地自然史研究会で取り組むべき課題であることが示唆された。【文責：岩船】

4. 臨時集会の報告

日本地理学会会場（駒沢大）にて当会の臨時集会を開催しました（参加者＝12名）。議題は次の通りです。

1) 1991年度も東京都立大学で事務局を運営することが承認されました。

2) 1990年度の活動（例会、通信、その他の行事）が報告されました。

3) 1990年度の会計（収支）が報告されました。

4) 例会話題提供者について意向・意見を募りました。

5) 今年度の”夏の学校”開催地について候補地を募りました。

6) その他、当会の活動内容全般について意見を募りました。

[なお、この集会の開催は事前にお知らせすることもなく、また学会参加者にも十分ゆきわたらなかったことをお詫びします。]

5. 1990年度会計報告

★収入の部		★支出の部	
前年度繰越	83,729.	通信費	49,041.
会費収入	118,500.	文具代	6,636.
雑収入	2,070.	コピー代	17,500.
		雑費	5,000.
+		+	
	204,299.		78,177.

次年度へ繰越 126,122.

6. 1990年度の活動（関連行事も含む）

日 付	内 容	場 所
4/3	本会活動方針に関する討議	地理学会（高山・極地作業グ集会）
5/26	第1回例会（小泉武栄・水野一晴）	明治大
6/23	第2回例会（秋の学会打ち合せ・調整）	明治大
8/9 ～	夏の学校	北ア、上高地～瀧沢
9/28～	地理学会オブション巡検	平標山周辺
10/1	地理学会高山・極地作業グ・シンポジウム	地理学会（上越教育大）
11/15	第3回例会（山本信雄・岩田修二）	明治大
12/22	第4回例会（小川真由美）	明治大
2/23	第5回例会（岩船昌起・吉田浩）	東京大〔上高地SGと併催〕
3/23	第6回例会（大宮剛・和気智宏）	明治大〔上高地SGと併催〕
4/4	臨時集会	地理学会（駒沢大）

7. 事務局からのお知らせ

- ㊦寒冷地形談話会事務局は、東京都立大学の移転にともない下記住所へ移設されました。
今後の連絡・郵便物の送付は下記へお願いいたします。

〒192-03 東京都八王子市南大沢1-1

東京都立大学理学部地理学教室大学院生室 0426-77-1111 (内3836)

担当〔菊谷愛彦・三浦英樹・高岡貞夫・小川真由美〕

- ㊧1991年度会費を同封の用紙にてお振り込みください。

なお、1990年度（以前も含め）会費を納入されていない方はあわせて至急振り込んでください。納入状況は事務局で照会できますのでお問い合わせください。

振込先（加入者）：寒冷地形談話会

口座番号：東京0-171342

- ㊨1991年度第1回例会は5月25日に開催する予定です（別途お知らせします）。

- ㊩例会での発表希望者を募集しています。また、文献紹介やフィールド情報などの原稿もお待ちしておりますので事務局まで連絡ください。

- ㊪上高地自然史研究会第3回集会在次の要領で行なわれます。

日 時：4月27日（土） 15:00～

会 場：明治大学駿河台校舎（詳細は当日大学院棟玄関に掲示）

演 題：池田明彦（品川区）「上高地周辺のチョウの分布と植生」

赤松直子（学芸大）「サワグルミの分布とその規定要因」

問合せ：岩船昌起 東北大・地理・院 022-222-1800 (EXT.3462)

